

踊る

二諦室



晶文社

書下しノンフィクション

ゆりけしじやつぱ
長谷川海太郎 伝

地獄子 細

ひとりの大きな若者が1920年代のアメリカ大陸を放浪し、昭和の日本に戻ってきた。
『テキサス無宿』の谷譲次、『丹下左膳』の林不忘、『浴槽の花嫁』の牧逸馬—大衆文化の成立期に、一人で三つの名前を使って活躍した伝説的な作家の人と仕事に迫る

踊る地平線 おど ちへいせん めりけんじやつぶ長谷川海太郎伝

一九八五年一月二五日発行

著者 室謙二

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・一二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六・六二七九九

中央精版印刷・美行製本

© 1985 Kenji Muro

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

著者について

室謙二(むろ・けんじ)

一九四六年東京に生まれる。明治学院大学中退後「ベ平連」の活動に従事。

著書「旅行のしかた」「アジア人の自画像」

(晶文社)

踊る地平線

めりけんじゃつぷ
長谷川海太郎伝

室謙二



晶文社

ブックデザイン

平野甲賀



アメリカ放浪時代の長谷川海太郎

踊る地平線——めりけんじやっぶ長谷川海太郎伝 目次

第一章 一人で三人

谷譲次・林不忘・牧逸馬

スクラップブック

15

不忘は不可ん！

30

11

第二章 函館・東京

植民地港町

35

父と母

39

ひとかどの人物になれ

42

国際寺町と短歌

49

五稜郭のストライキ

56

東京

60

不満足

71

出発

75

第三章 海太郎の上陸

一九二〇年代アメリカ

81

家族の伝説 86

脱走 92

オペリンからの手紙 99

第四章 アメリカ方々記

大陸横断列車 107

文化ショックとへめりけんじやつぶく

フィッツジェラルド家の召使 123

見世物小屋のカッポレ 133

「IWWと……私」 142

Sail, Ho 150

113

第五章 めりけんじやつぶ商売往来

群像 158

サム・カゴシマ 161

ヘンリー河田 166

トマス・ホリ 177

フリスコ・スズキ 175

第六章 谷譲次の意味

へめりけんじやっぶの都市空間

181

へめりけんじやっぶのアイデンティティ

へめりけんじやっぶの文体

202

189

第七章 ハンドバッグの中の手紙

約束

203

帰国

204

神経衰弱

208

大正十四年十月

211

恋愛することと書くこと

219

第八章 丹下左膳と安重根

日本を学習する

225

丹下左膳評判記

229

原型としての丹下左膳

233

転生する左膳

242

牧逸馬のテーマ

254

終章

安重根の裁判

262

『安重根』と『大陸』

268

家族の伝統とアメリカ

275

新しい家と死

283

注 289

あとがき

294

第二章 一人で三人

谷譲次・牧逸馬・林不忘

長谷川海太郎の精神の中の、どこか根本のところに、生き生きとした明るい力がある。彼は一八〇センチメートル以上ある長身だったが、その体には囚われない軽さがあった。そして、当時の「日本」という型から、体と精神のあちらこちらをほみ出させてしまっていた日本人だった。

だから今になって、遠くから彼を眺めると、何か滑稽な感じが残る。彼は当時の時流に乗ってはいたが、本当はその時流と、ちぐはぐなところがあった。

彼を短い言葉で紹介するのは難しい。まず、彼をなんとという名前で呼ぶのかが問題になる。彼は谷譲次であり、林不忘であり、牧逸馬であった。

谷讓次という名前でなされた仕事が好きなのは、彼を谷讓次と呼ぶだろうし、牧逸馬の仕事を重視する人は、彼をまず牧逸馬と呼ぶだろう。そして林不忘が一番おもしろいという人は、彼を林不忘と呼ぶだろう。

だが彼の本名は、長谷川海太郎だった。私たちは彼のことを、その時々違った名前で呼ばなければならぬのだが、それらの名前の向こう側には一人の男がいるだけだ。

長谷川海太郎は一九〇〇年（明治三三年）に、佐渡で生れた。生れてすぐ函館に移り、幼年期、少年期をそこで過ごし、東京を経てアメリカに留学。しかしすぐにアメリカの大学を飛び出して、一九二〇年代のアメリカを様々な仕事をしながら、歩き回った。

一九二四年（大正十三年）、貨物船の石炭夫として大連に着き、船をおり、そこから朝鮮半島をへて帰国。再びアメリカに渡ろうとしたが、結局アメリカには行かず文章を書き始める。まずアメリカ体験を谷讓次の名前で書いた（へりけんじゃつぷ）物で名が知られ、次に林不忘の名で書いたまげ物、特に『丹下左膳』で有名になり、同時に牧逸馬の名前で怪奇小説あるいは『この太陽』などの家庭小説・現代物を書き、当時の大衆文化状況の中での大流行作家になった。

一九三五年（昭和十年）六月、鎌倉の新築の大きな家で急死。三五歳であった。彼が死んだ時、彼の名前の中で一番有名だったのは牧逸馬で、だから彼は「牧逸馬氏急逝」と報道された。

谷讓次、林不忘、牧逸馬が、一人の人間だということを知らなかった読者は、当時たくさんいた。

今では、谷譲次、林不忘、牧逸馬の三人は、ほとんど忘れられている。『丹下左膳』の名前はみんなが知っているが、その作者の名をすぐ口に出して言える人は少ない。かつての流行作家は忘れられている。

忘れられている人と作品を持ち出して来て、何をしようというのか？ 忘れられていることは、忘れさせたほうが、いいのではないか？

私は古道具屋にはなるつもりはない。ノスタルジアで彼と彼の作品に磨きをかけて店先に並べようとしているわけではない。

そうでなくて、彼と彼の作品はいまだに生きているのである。だからこそ私はこうやってこの本を書き始めた。

彼の作品の中では、私には特に谷譲次の名前で書かれたものが、ずば抜けて面白いのだが、それは五〇年以上前に書かれたものとして面白いのではない。私たちの生きるいまの文章として面白く、意味と迫力がある。

それは面白いだけではなく、ある種の教育を含んでいる。谷譲次の文章の持っている挑発的な娯楽性と教育性は、彼の生きていた時代、今から五〇年以上前には、ほとんど理解されないか誤解されていたことが多かった。彼が一九二〇年代のアメリカとそこに生きる無頼の日本人たちを書いた一連の文章、〈へめりけんじゃつぶ〉物は、あの時代より今のほうが理解されやすい。六〇年近く前、谷譲次が当時のジャーナリズムに登場してきた時、谷譲次は騒々しいジャズの文体で書くモダニストとして、新しい流行として受け取られた。

しかしあれは流行ではなかった。新しい方法であった。彼の文体にどういう意味があつて、彼が何を書いていたのかは、いまの方がはっきりと分かる。

長谷川海太郎には、様々な垣根とか境、たとえば国とか、人種とか、言葉とかの違いを、案々と越えていく力、オブティミズムがある。そしてまた彼は、その垣根・境をはみ出しながら、同時に自分が最初に立っていた場所、日本とか日本人とかアジア人、日本語、自分の家族などに対する愛着を持ち続けていた。

海太郎の中にはこの二つのこと、つまりくり返し垣根・境をはみ出して行く力と、その境の内側の、もとの世界へのひねくれない愛の幸福な一致があつた。

海太郎は自分がある形で愉快に生き抜くことで、ひとびとに日本人のアイデンティティのあり方の一つを示した。

彼はいつも、精神的というより肉体的だった。彼の生き方のスタイルも、文章のスタイルも、ともに肉体的だった。文語的でなく、はなはだしく口語的だった。

彼は、どんなにあることに巻込まれても、その中で自分を演劇化して、事件をパロディとしてしまう方法を持っていたらしい。

スクラップブック

長谷川海太郎は自分の部屋に、三つの違う机を持っていた。モダンな机で谷譲次のものを書き、紫檀の古い机では林不忘のものを、最後の大きな机では牧逸馬のものを書いた、と言われている。

しかしこれは長谷川海太郎の未亡人、和子夫人によれば作り話であった。そういう作り話、神話ができるぐらい、彼はいろんな文体でさまざまなテーマを、三つの名前を使って書き分けた。それも多量に書いた。

いまなら彼のやり方は、ジャーナリズムに自然に受け入れられたかもしれないが、彼の活躍したのは半世紀前であり、当時それは何か異常な事だと思われていた。事実それは一人の人間の短時間における仕事の量としては、異常なものだったかもしれない。彼は十年間書いた後に、突然脳溢血で死ぬ。それが昭和十年（一九三五年）であった。彼がその十年間にどんな文章を書いたのか、これから先の何ページかは彼の書いた文章を切り取ってきて、スクラップブックのように貼ってある。

まず最初は谷譲次の文章である。